

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	永島 すえみ（鹿児島県）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	甲第 1 3 号
学位授与の日付	平成 2 8 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	人間関係構築におけるケアリングの研究 — 関係性における相互作用の様態 —
論 文 審 査 委 員	主査 大西 正倫 （佛教大学教授） 副査 松岡 千代 （佛教大学教授） 副査 田中 圭治郎（佛教大学名誉教授）

### 〔 1 〕 論文の概要

この論文には、非常にユニークな点が二つある。①狭く〈看護〉領域に限定しない、論者独特の〈ケアリング観〉に立っていること。②Bronfenbrennerによる、人間の発達を「生態学的環境」との相互作用と捉える概念図式を、自身の論理展開の柱としたこと。

しかしながら、この二点は、受け止め方を間違えると論文そのものの評価を根本的に左右しかねない事項である。「論文の概要」を提示するにあたり、各章の要約を順序通りに列挙するに先立って、まずは上記の二点について述べることにする。

#### ① ケアリング観

本研究の前提に、論者独特のケアリングの捉え方がある。注意して受け止めなければならない。

「ケアリング」と聞くと、われわれはまず〈看護〉や〈介護〉を思い浮かべる。〈教育〉を含める人もいる。それらはいずれも〈ケアをする人／受ける人〉の立場と役割が固定された関係である。

しかし、論者の「ケアリング」の概念はもっと広く、もっとゆるやかである。論者は次のように述べている。

- ・「ケアリングは、看護職者や教職者が実施する職業としてのケアリングはもちろんであるが、その他にも親が子どもにするケアリング、子どもが親にするケアリング、仲間どうしでのケアリング、人間が動物や植物にみせるケアリングと、誰もが日々

の生活において自然に実践している。しかしながら日々の自然な営みであるが故に習慣となり、意識上にのぼらせることは少なくなっていると思われる。」（2頁）

- ・「この互いに関心を向けてケアし、ケアされる過程『ケアリング』“caring”は、意識するしないにかかわらず常に我々の身の回りに起きていて、いろいろな関係性の様態を醸し出している。」（27頁）
- ・「人が他者へと関心を向けて互いに意思を尊重しようとしているかぎりにおいて自然発生的にどこにおいても行われるもの」（2-3頁）

◎「人間だれしもが自然発生的に他者との関係性を構築するときに実施している」（『論文要旨』7頁）

- ・「誰もが自然に実施していながら意識されてこなかった『ケアリング』」（18頁）

これらの文言は、看護をはじめとする職業的意図的行為としてのケアリングとは別に、もっと自然なケアリングが実際行われている、それに目を向けようという、論者からの呼びかけの言葉である。そしてこれに伴って、〈子どもの遊び〉（論文第一部第1章）や〈高齢者のおしゃべり〉（第一部第3章）もケアリングとして捉えられるようになるのである。

論者によるケアリングの定義ないし概念規定は次の通りである。

- ・「①他者に関心を向けて共感し、その思い、意志を尊重してかかわりを継続して応答し合う関係を築いてゆくこと、②自分自身に関心を向けて、その思い、意志を確認・尊重し、他者とのかかわりを継続して応答し合う関係を築いてゆくこと」（19頁）

ケアリングをめぐるのは、もう一点、見落としはならないことがある。それは、いわば“何のため”にケアリングを行うのかという問題である。論者はこう述べる。

人々が社会生活を営むうえで他者との交流を保ち、他者及び自らの意思を尊重しながら社会生活をおくることのできる成熟した大人に成長するには、生涯を通して他者へと関心を向け、あるいは他者の関心を引いて応答し合う関係を築くことが大切になる。そうすることで自らの信念や思いを振り返り、他者の思いや信念を問い、相互の異同を学び、互いの価値判断の<sup>ベース</sup>基となる文化や法制度について学び、生涯を通じて他者との交流を維持することができると考えるからである。そこで本論稿では、今日の社会で失われてきている他者との関係を維持・構築する手立てを見いだせるのではないかと考え、ケアリングの様態について検討する。（『要旨』1頁）

つまり、論者はケアリングを「今日の社会で失われてきている他者との関係を維持・構築する手立て」として考えているのである。論文の題目に「人間関係構築」とある所以である。けれども、そのためには、ケアリングのリアリティを事例の中から掘み出し、記述しなければならない。論者が「様態」と言うのは、それである。

また、上記の引用文は、期せずして、人間の生き方とあるべき社会の姿を述べたものとなっている。このような大きな観点から、論者はケアリングについて考えているのである。

②Bronfenbrennerの「生態学的環境」（『論文要旨』2-3頁、本文3頁、19-20頁、27-8頁、166-7頁）

これを論理展開の基本的枠組にしたのが、本研究の独自性の一つである。論者によれば、

Bronfenbrennerは、『人間発達の生態学』において、人間の行動が展開される環境を人が経験する活動、役割、対人関係のパターンとして、1組の二者関係における対面的相互作用に影響するマイクロシステム（Microsystem）、子どもにとっての家庭と学校など二つ以上の行動場面の相互関係や直接的な行動場面ではないが両親の職場やきょうだい通っている学校における友人ネットワーク等の間接的な影響を生じるメゾシステム（Mesosystem）、属する組織や教育などに間接的に影響を生じる法律や制度などを含めるエクソシステム（Exosystem）、信念や文化における人々の価値観などをマクロシステム（Macrosystem）と命名している。そして人間の生涯における発達とは、環境との相互作用であるシステムとして拡張、移行する過程であり、より複雑なレベルでの役割や活動を可能にするとして仮定している。本論稿の独自性の一つ目は、このBronfenbrennerの定義の枠組みである環境を人の生涯におけるケアリングの場の枠組みにしたことである（166-7頁）。さらに簡略化すれば、次のようになる。（本文3頁）

- 1) 家庭などの直接的な二者関係としての環境システム：マイクロシステム（Microsystem）、
- 2) 職業上のケア者と被ケア者の関係や地域の仲間などとの三者以上の人々の間における関係としての環境システム：メゾシステム（Mesosystem）、
- 3) 法律や情報などとの関係としての環境システム：エクソシステム（Exosystem）、
- 4) 文化や価値観・信念などとの関係としての環境システム：マクロシステム（Macrosystem）

しかしながら、彼の図式を援用したこと自体がそのまま論者の手柄となるわけではない。ケアリングにおける葛藤は、本論文第二部第2章に見られるように、結局のところ、ケア者被ケア者を問わず、その人が自分の人生において紡ぎ上げてきた価値観や信念のレベルにおける葛藤として現れる。ところでBronfenbrennerの「生態学的環境」は、単なる地理的空間の謂いではない。そこに法律や制度、文化、そして信念や価値観を含む、システムとしての環境である。そこにおける葛藤の克服とは、価値観や信念の交流を通しての克服であり、そこに自己成長が遂げられるのである。これはまた、論文題目にある「人間関係」の「構築」であり、同時に、それがその人の〈成長〉を意味するのである。こうして、〈葛藤の克服〉が人間的〈成長〉につながる構造が析出される。このような次第で、本論文は全体として、人間の成長論、発達論であり、広義の教育論であることになる。さらにまた、人の生涯発達の姿を、4つのシステム間の〈移行〉と捉えることにおいて、一種の生涯教育論となるのである。

さて、あらためて論文の概要について述べる。

論文構成としては、序章、第一部（第1，2，3章）、第二部（第1，2章）、第三部（第1，2，3，4章）、終章よりなっている。

論文全体を通して、システムとしての環境を柱にして、ケアリングが行われている場面の様態及び生じた葛藤への対処と克服について論究している。章立てとしては、第一部ではマイクロシステムである母子及びきょうだい間、メゾシステムである人工呼吸器を装着している子どもとケア者間、高齢者とその仲間におけるケアリングの様態を詳述している。

第二部では、哲学者であり教育者でもある三人の研究者、ミルトン・メイヤロフ、ネル・ノディングズ、ヘルガ・クーゼのケアリング論に言及するとともに、ケア者の葛藤とその克服について論考している。第三部ではエクソシステムである法律や制度とケアリングの関連、マクロシステムである価値観や文化とケアリングの関連について論じている。終章では、本研究の独自性と今後への課題について述べている。

以下、章ごとに示せば、序章「本論稿の構成及びわが国における人間関係構築を目指したケアリング論の研究動向」では、人間関係の希薄化する社会において、「一人ひとりが、社会人として自らで生活を営むために他者との関係を紡ぎ、支援のネットワーク作りをしながら生きていくことが求められ」、「各々が、孤独な一人ひとりになるのではなく、生涯を通して他者への関心を向けあるいは他者の関心を引き応答し合う関係を構築して仲間社会を広げていくこと」、「自らの信念や思いを振り返る」ことが必要であるとする。このように、他者に関心を向けて応答し合う関係及び自分自身に関心を向けて他者と応答し合う関係を築いていくプロセスそのものが、ケアリングである。

第一部「マイクロシステム、メゾシステムにおけるケアリングの諸相」第1章「母子及びきょうだい間におけるケアリング」では、母と2人のきょうだいのバス停での行動・言動の中に、自然発生的なケアリングとケアリングの「芽生え」を観察している。本章は、論者自身の、原理的に新しいケアリング観を例証する章の一つである。

第2章「人工呼吸器を装着している子どもとケア者におけるケアリング」では、先天性の筋疾患で誕生直後から人工呼吸器の装着を余儀なくされた子どもへのケアリングはどうあるべきかという問題をめぐって、マイクロシステムである母子関係、メゾシステムとしての母親と看護師の三者関係の検討がなされている。本章は7歳の喜笑（きえ）ちゃん（仮称）のケアに携わった5人の看護師への面接調査を基に構成され、彼女たちケア者の心の変化を「共感」、「思い入れ」、「同情」の3つの角度から分析している。

そこでは「喜笑ちゃんもまたケア者の期待に応えて吟味し、確認しながら学び深めて」おり、ケア者たちも喜笑ちゃんの思いに共感し理解し、関心を向け続けることで「意志の疎通が図られた」、「正しかった」と手応えと満足を得、それが自信につながっていく。ケア者が単にケアするだけでなく、相手の立場に立って考察を深めることによって相互の理解が深まってゆくことがわかる。

第3章「高齢者の生きがい喪失とその回復へ向けた仲間どうしのケアリング」では、高齢者が社会的に引退した後、メゾシステム（社会的仲間集団）を失い、マイクロシステム（個人的に限られた人間関係）へと後退する中で、どのように生き方を確認するかが、テーマとなる。高齢者どうしのケアリングを通して、より一層社会性の求められる営みへ参加することが必要である。

第二部のタイトルは「ケアリングにおけるケア者の葛藤」であるが、その第1章は「ケア及びケアリング論」である。メイヤロフ、ノディングズ、クーゼ、さらにはジーン・ワトソンのケアリング論が紹介され検討される。マルティン・ブーバーの「我―汝」関係をモデルとするケアリング観が孕んでいる問題性をはじめ、簡単には結論の出せない原理的な問題が論及されている。

第2章「ケアリングにおけるケア者の葛藤とその克服」は、近畿圏内の3つの病院の看護師への質問紙調査をまとめたものである。被ケア者は、末期癌等終末期ケアを必要とす

る重篤な患者で、ケア者と被ケア者・家族とのあいだに治療に関する思いのズレが生じていた。そうした中、看護的ケアそのものを被ケア者とその家族から拒否された看護師が9名出た。これらのケア者を「受容タイプ」、「共感タイプ」、「葛藤タイプ」の3つのカテゴリーに分類した上で、個別に分析している。3つのタイプともに、「死への覚悟」と「生存の望み」のあいだの心理的動揺が見られた。看護におけるケアリングは「人間の尊厳を保持・促進し、守ることであり、卓越した倫理的な知識が必要」であるとともに、ケア者自身が被ケア者との「関係性を築くことのできる能力をもっていること、そしてケア者自身の能力の限界を知っている」必要があると結論づける。職業的ケアリングの本質に迫る研究であると思われる。

第三部「ケア者の葛藤への対処；セルフケアリング」では、「生命」「死」の問題が取り扱われている。第1章「生死についての認識の問題」は、脳死の概念と「生きる」とは何かを考察する内容となっている。第2章「生命の企投とケアリング倫理」は、先天性横隔膜ヘルニアの診断を受けた倫法（みちのり）ちゃん（仮称）へのケア者の葛藤がテーマである。ケア者が倫法ちゃんの母親の気持ちにどのように寄り添うべきかが問われている。

第3章「死の不安・社会的死からの脱却」では、自己の「死」や肉親の「死」にどう対処すべきかを医療職者と患者家族との関係の中で、ケアリングを通して「生きることの意味」を考えさせている。第4章「関係性のア・プリオリ」では、ブーバーの「我—汝」「我—それ」の考え方を通して、「人が環境や他者を認識する」とは何かを考察している。ケアリングにおいて、相手を〈汝〉と受け止めるか〈それ〉と見なすかは、〈関係〉の在り方の問題として、決定的に重大である。論者の主張で注目すべきは、メイヤロフのように「我—汝」関係を全面的に肯定するわけではないという点である。

論者によれば「従来の考え方、思想を保守することに安住せず、自分自身を見つめ、自己否定し、新しい自分を絶えず求める努力、自分だけの思い込みを乗り越える努力」が求められる。ケアリングは人間性の涵養に通じる。この着眼は、ケアリングが、看護の領域においてだけでなく、生涯教育の視点から教育学的に考察されることを求める論拠となる。

最後に終章では「本研究の意義と今後への課題」が述べられる。

## 〔2〕 審査結果の要旨

本論文の特質の第一は、本報告書「〔1〕論文の概要」のはじめに述べたように、〈ケア者—被ケア者〉の役割関係としての職業的ケアリングだけでなく、日常生活において自然発生的に行われるケアリングに目を向け、しかもそれを可能性としては現代社会に生きる老若男女すべての人間どうしの関係構築を目指すものと捉えて提出した点にある。すなわち、ケアリング観の革新を提起したことになる。

第二の特質は、このケアリング論を、人間の発達を環境システムとの相互作用として起るものと見るBronfenbrennerの「生態学的環境」の環境システムにのせて捉えた点である。ここにケアリングは一生涯つづく営みとなり、ケアリングを通じた人間の〈成長〉は一生涯の出来事となる。

第三に、ブーバーの「我—汝」「我—それ」という一対の関係モデルに照らしてケアリ

ング関係を吟味したこと。そしてその際、ケアリングのあるべき姿を一面的に「我一汝」関係に見るありふれた見方を脱し、「我一それ」との両義的・両面的関係と捉えることを提唱したのは、特筆すべき点である。（cf. 152 頁）

けれども、ここに指摘した特質は、それぞれその裏側に“残る課題”を宿している。まずはケアリング概念である。

大きく二種類のケアリング概念が、乖離しつつ同居している観がある。二つのケアリング概念を包摂ないし止揚する高次のケアリング概念を彫琢されたい。

次に、ブロンフェンブレナーの「生態学的環境」のシステムである。その教育学的展開として、「生涯発達」という観点は示されているものの、具体的な様態については未詳である。今後はここから自覚的に生涯教育論を展開してもらいたい。

第三に、ブーバーの「我一汝」関係をケアリング関係のモデルと見なすべきではないとする判断についてである。この問題は重要な論点である。ケアする相手の人数の問題など、“事情”のせいにしてはならない。関係性の本質の問題として思索を深められたい。

しかしながら、これらの課題は、ここまでの探究の結果浮上してきた次なる課題である。本論文の欠陥を意味するものではなく、課程博士論文としての本論文そのものの価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断する。